

表やグラフに関わる日本語能力の育成を目指して ——中級聴解・会話クラスでの実践報告——

松田 佳子、田淵 七海子

1. はじめに

本稿は、2010 年度前期（6 月～9 月）にタイのタマサート大学で行われた学部 3 年生（中級）対象の「日本語聴解・会話 3」（以下、「聴解・会話 3」とする）の実践報告である。この授業の目標は、以下の 2 点であった。1 点目は、中級レベルの聴解・会話の能力を身につけること（具体的には、ディスカッションで自分の意見を理由とともに分かりやすく述べたり、聞き取れたりすること）、2 点目は、口頭発表能力を身につけること（具体的には、表やグラフに関わる日本語能力を身につけること）であった。本稿では、主に目標の 2 点目、口頭発表能力の一つとした「表やグラフに関わる日本語能力（理解力と産出力）」の指導内容と方法を中心に報告する。

次章では、本学の「聴解・会話」授業全体の流れとその問題点をまとめる。そして、3 章でその問題点の解決のために、「聴解・会話 3」でどのような授業を目指すこととしたか述べ、4 章で本稿の目的と意義をまとめる。そして、5 章で「聴解・会話 3」の実際の授業の流れを示しながら、授業デザインや教材作成において工夫した点を述べる。6 章では、学習者の「聴解・会話 3」に対する評価や意見を質問紙調査の結果をもとに述べる。7 章で、表やグラフに関わる日本語能力（理解力と産出力）を身につけさせるために、教師は授業デザインや教材作成においてどのような点に配慮すればよいのかについてまとめ、最後に、8 章で今後の課題を述べる。

2. 本学の「聴解・会話」授業の問題点

本学では、日本語の主専攻生および副専攻生を対象とした聴解・会話クラスをレベル別に、計 6 期に渡って開講している。2 年生の前期から「聴解・会話 1」を受講することが可能となり、「聴解・会話 1」と「聴解・会話 2」では、場面、機能、話題シラバスを織り交ぜ、自分や身の回りのことについて聞いたり、話したりすることができることを目標としている。「聴解・会話 3」以降は、主として話題シラバスを用いて、抽象的な内容に関するディスカッションができることを目標としている。

本学の「聴解・会話」授業の特徴として、初級段階から継続的にプロジェクトワークとその口頭発表を取り入れていることが挙げられる。例えば、タイの文化紹介や、未来の新商品の発表などである。口頭発表を継続的に取り入れている理由として、学習者の多くが、将来、日系企業での就職を希望していることが関係している。企業では、表やグラフなどの資料の作成能力や、それらを用いた口頭発表やディスカッションを遂行する能力も求められるであろう。よって、口頭

発表能力は、学習者に求められる日本語能力の一つであると考え、各レベルで口頭発表を取り入れている。

しかし、本学の「聴解・会話」授業の問題点として以下の2点が挙げられる。まず、(1)口頭発表を初級から継続的に取り入れているものの、それらは、学習者に口頭発表能力を身につけさせるという明確な目標をもったものではなく、口頭発表を経験させているに過ぎないという点である。また、(2)「聴解・会話4」以降、客観的資料を用いながら、ディスカッションを行うことを想定しているが、これまでの「聴解・会話3」では、機能シラバスが中心で、客観的資料を扱った指導やディスカッションはほとんど行われていなかった。そのため、「聴解・会話4」では、客観的資料の基本的な内容に関する指導と並行して、ディスカッションの指導も必要であり、多くの内容を一度に学習するのは学習者にとって負担であった。つまり、「聴解・会話3」が、「聴解・会話4」の橋渡しになるような授業内容となっていなかったと言える。

3. 「聴解・会話3」の方針

筆者らは、上記2点の問題を踏まえ、「聴解・会話3」の授業内容を検討した。まず、(1)の問題点を解決するために、口頭発表能力の育成を意識した継続的な指導を授業で行う必要があると考えた。これは、水野(2010)が上級・超級学習者に口頭発表能力が十分、身につけていないことを示した上で、「プレゼンの技術をどこかで適切に指導すべきなのではないか」(水野 2010: 8)と述べていることから、口頭発表能力を身につけさせるには、段階的で継続的な指導を踏む必要性があると言える。また、(2)の問題点を解決するために、「聴解・会話3」では、簡単なディスカッションと並行して、客観的資料の基本的な読み取りや説明ができることを目標として取り入れ、「聴解・会話4」以降で客観的資料を使ったディスカッションへの橋渡しになるような授業内容が必要であると考えた。

以上を踏まえ、筆者らは、「聴解・会話3」の授業で中級レベルの聴解・会話(主にディスカッション)の能力を身につけさせることと並行して、学習者の口頭発表能力を継続的な指導により育成することを目指した。そして、口頭発表能力の一つとして、「表やグラフに関わる日本語能力(理解力と産出力)」に着目した。表やグラフに関わる日本語能力(理解力と産出力)に着目した理由は2点ある。1点目の理由は、客観的資料として表やグラフが使われることが多いが、学習者が読み手あるいは聞き手として表やグラフの読み取るポイントや聞き取るポイントが日本語で理解できなければ、内容理解に影響するという点、2点目の理由は、学習者自身が書き手あるいは話し手として調査結果を表やグラフにまとめる時に、日本語で的確に説明ができなければ、聞き手や読み手の内容理解に影響するという点である。なお、本稿では、「表やグラフに関わる日本語能力(理解力と産出力)」の「理解力」を「他者の作成した表やグラフを見て、そのポイントとなる部分を読み取るあるいは、聞き取る能力」と定義する。また、「産出力」を「調査内容に応じ

て適切な表やグラフを選択し、必要な情報を表やグラフにまとめること、さらに、表やグラフのポイントとなる部分を的確に説明する能力」と定義する。

4. 本稿の目的と意義

本稿の目的は、以下の2点である。

- (1) 「中級レベルの聴解・会話（主にディスカッション）能力」の育成と並行して、「口頭発表能力（表やグラフに関わる日本語能力：理解力と産出力）」の何をどのように指導したかを報告すること
- (2) 学習者への質問紙調査の結果を踏まえ、表やグラフに関する日本語能力を身につけさせるには、教師は、授業デザインや教材作成においてどのような点に配慮すればよいのかを明らかにすること

これまでの口頭発表における学習者の問題点を扱った先行研究（神吉 1995、大藤 2001、高橋 2001、藤家 2004）では、学習者の問題点の把握とそれに対する方策を示すことにとどまっている。教師が学習者の問題点をどのように授業で取り扱い、意識的かつ継続的に指導していけばよいかが具体的に示されていない。そこで、本稿では、口頭発表能力の一つである表やグラフに関わる日本語能力（理解力と産出力）をどのように継続的に授業で取り扱い、指導したのかを具体的に報告する。

5. 実践例の紹介（2010年度「聴解・会話3」）

5.1 「聴解・会話3」の概要

「聴解・会話3」は、中級レベルの学部3年生を対象とした授業で、1コマ90分を週2回、全15週のクラスで、計30コマ（90時間）だった。学習者は54名で、3クラスに分けた。ディスカッションならびに表やグラフに関する日本語学習は初めてであった。

筆者らは、話題シラバスの教材を作成し、授業を実践した。各課の教材は、2部構成になっており、1部がディスカッションのための教材、2部が表やグラフの教材だった。前述のように、このクラスでは、「中級レベルの聴解・会話能力（ディスカッション能力）」を伸ばすことと並行して、「口頭発表能力（表やグラフに関する日本語能力）」を身につけることを目指していたため、ディスカッションと表やグラフの話題は関連のあるものを選んだ。自主教材を作成した理由は、それらの力を段階的に身につけることを目指した教材が見当たらなかったからである。具体的な教材の構成、内容は、次節で述べる。

5.2 表やグラフに関わる日本語能力の到達目標と指導内容

次に、本稿の目的に掲げたように、「中級レベルの聴解・会話（主に、ディスカッション）能力」と並行させながら、「口頭発表能力（表やグラフに関する日本語能力）」の何をどのように指導し

たかについて報告する。なお、表やグラフの学習時間は、各課全体の3分の1程度であった。授業で取り扱った話題と表・グラフに関する活動の流れを表1に示す。

表1 2010年度「聴解・会話3」の授業内容と表・グラフに関する活動

	話題	表・グラフに関する日本語能力と各課の活動の到達目標(■)と内容	
第1課	結婚と仕事／パートナーとの関係や役割分担	理解	■グラフの種類と表・グラフの説明の仕方の流れを知る ■表と円グラフ、帯グラフの読み取り、聞き取りができる ・グラフの種類、表現・語彙①、グラフの説明をする時の表現 ・かけがえのないもの* (表) ・結婚している人が出会ったきっかけ (円) ・男は仕事、女は家庭という考え方に賛成か (帯)
第2課	タイ人と日本人の国民性	理解	■円グラフからわかったことを使って、自分の意見が述べられる ■棒グラフの読み取り、聞き取りができる ・電車の遅れでどのくらい待たされるとイライラするか (円) ・就職する時の第1条件 (円) ・寺・神社・教会に行く回数* (棒)
第3課	最近よく売れているまたはあまり売れていない商品	理解・産出	■折れ線グラフの読み取り、聞き取りができる ■棒または折れ線グラフを使った口頭発表ができる ・表現・語彙② ・スターバックスコーヒーの売上の推移* (折れ線) ・任天堂DSの売上推移* (折れ線) ・CDとカセットテープの生産枚数の推移 (折れ線) ・「商品」に関する口頭発表(個人発表5分、質疑応答5分)
第4課	エコキャンペーン	産出	■アンケートを実施して、円または棒グラフを作成し、説明ができる ■表やグラフを用いて、環境問題について口頭発表ができる ・「エコキャンペーン」に関する口頭発表(グループ発表15分、質疑応答10分) ・携帯電話のリサイクルに関するアンケート結果*

*は、内容理解の聴解練習を教師が作成して実施

表やグラフに関する指導では、次の2点でそれぞれ段階的な指導を行うことに配慮した。(1)理解から産出へという流れ、(2)視覚形態の易しいものから難しいものへという流れである。(1)については、学習者はこれまでに表やグラフを扱った学習を母語でもそれほどしていないことを

踏まえ、まずは十分なインプットが必要だと考えたためである。(2)については、表や円、帯グラフは一見して全体の傾向や割合がわかりやすいのに対して、比較や推移を表す棒グラフや折れ線グラフはやや複雑であると考えたためである。そして、この段階を踏むために、(1) 表やグラフに関する語彙や表現を一覧にすること、(2)語彙や表現の代入練習となるグラフを取り入れること、(3)表やグラフを使った聴解練習を入れ、そのスクリプトが口頭発表のモデルとなるように考慮することの3点に配慮して教材を作成した。次節では、この教材を使いながら、どのように段階を踏んだのか学習項目に沿って見ていく。

5.3 理解中心の段階

第1課と第2課では、表やグラフの理解のための活動を取り入れ、表、円、帯、棒グラフを用いた。この段階では、基本情報（タイトル、調査機関、調査時期、縦軸と横軸、単位など）の読み取りならびに聞き取りを重点的に指導した。具体的には、グラフの種類や用途によって使うグラフが異なることを実例を使って学んだ。例えば、1ヶ月間、毎日体重を測ってグラフを作る場合にどのグラフを使うかを考えた後で、よく使われる語彙や表現を一覧にして示したり、グラフを使った代入練習をしたりした。また、表やグラフを見ながら説明を聞いて、内容が理解できるかどうかを確認した。

さらに、「中級レベルの聴解・会話（主に、ディスカッション）能力の育成」に関連して、表やグラフの突出している部分に着目して、その理由を考えたり、自分の意見を述べたりした。例えば、第2課では、タイ人と日本人の国民性に関してのディスカッションを行ったが、時間の捉え方が異なる例として、「日本人は電車の遅れでどのくらい待たされるとイライラするか」という円グラフを見せ、そこからわかることを述べ、タイ人だったらどのような結果になると思うかを話し合った。このように、客観的資料を用いて、意見を述べる指導も行った。

5.4 理解から産出へ

続く第3課では、表やグラフの理解の指導も継続して行いながら、徐々に産出に移行した。授業では、まず折れ線グラフが理解できるように指導した。グラフを見ながら内容を聞き取る練習をしたり、推移を表す語彙や表現の導入と代入練習を行ったりした後、産出活動を行った。

口頭発表のテーマは、「タイまたは日本で最近よく売れているまたはあまり売れていない商品」であった。学習者は自分で商品を選び、ウェブサイトで売り上げや生産量の推移のグラフを探したり、グラフが見つからない場合には数値情報からグラフを作成したりした。そして、グラフの説明とグラフからわかること、さらにはどうしてそのような結果になっているのかについて社会背景と絡めた考察を加えたスクリプトを作成し、発表した。スクリプトは教師が添削を行った。ここでは、聴解練習のスクリプトが口頭発表のモデルとなっていた。例えば、タイで売り上げの伸びているポテトチップスの「Lay」を取り上げて、キャンペーンが功を奏したことを紹介したり、インスタントラーメンの「Mama」を取り上げて、2010年のタイ国内のデモと絡めて考

察したりした。

このような一連の活動を通して、表やグラフは、意見を述べる際に客観的資料の一つとして有効であることを示した。また、グラフの背景にある事柄を考察することで、話す「内容」にも着目させた。

5.5 産出中心の段階

第4課では産出を中心に据え、これまで学習してきたことを使ってグループでプロジェクトワークを行い、発表した。身近な環境問題を一つ取り上げて、クラスメイトに対して「エコキャンペーン」を行うという内容だった。発表では、(1) 取り上げたキャンペーンに関するアンケートをして、その結果をグラフにまとめることと、(2) 現状説明の客観的資料としてウェブサイトなどに掲載されている表やグラフを用いることの2つを条件として課した。例えば、「ハンカチを使おう」「ごみを分別しよう」「さとうきびから作られた食器を使おう」などが各グループのテーマであった。この学習活動を通して、学習者にこれまでの学習項目を振り返らせ、定着を図った。

このようにして、「聴解・会話3」の授業では、全体の傾向や割合を述べる表や円、帯グラフの読み取りや聞き取りができること、そこからわかることを述べることから始め、比較や推移を表す棒グラフならびに折れ線グラフの読み取り、聞き取りへと移行した。そして、棒または折れ線グラフを用いた口頭発表、さらには表やグラフを作成して発表する産出へと段階を踏んだ。

6. 質問紙調査

6.1 調査の概要

「聴解・会話3」の授業および教材に対する学習者の評価や意識を明らかにするために、質問紙調査を実施した。質問項目は、全部で4項目であった。①教材が分かりやすかったか、②授業で得られたものがあつたか、③授業で学んだことは将来役に立つと思うか、④グラフを勉強しての意見や感想の4項目であった。①～③は、5段階評価（大変そう思う・そう思う・どちらとも言えない・そう思う・まったくそう思わない）をさせ、その評価理由も自由に記述させた。また、④は、自由記述で回答させた。アンケートはすべて学習者の母語であるタイ語に訳し、タイ語で記述させた。タイ語の翻訳は、タイ人日本語教師に依頼した。質問紙調査は、受講者54名を対象に、授業最終日である2010年9月29日に実施した。回収率は、100%で、すべての結果を分析対象とした。以下、質問項目ごとに結果を述べる。

6.2 調査の結果と考察

6.2.1 教材の分かりやすさ

質問項目①「グラフに関する教材は、わかりやすかったですか」の回答結果を表2に示す。()内は、回答者数である。

表2 「グラフに関する教材は、わかりやすかったですか」の回答結果 (54名)

大変そう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	まったく そう思わない
14.8% (8)	74.0% (40)	5.6% (3)	5.6% (3)	0% (0)

最も多かった回答は、「そう思う」で74.0%、次いで「大変そう思う」で14.8%であった。この2つの評価項目を合計すると、88.8%の学生が教材を分かりやすいと評価していることが分かった。分かりやすいと評価した理由をまとめると、3点ある。(1)語彙や表現、例文、グラフが豊富で読み取りやすいものであった点、(2)課のトピックやグラフの内容が学生にとって身近であった点、(3)教材の構成が易から難へ順序立てられていたの3点である。中でも(1)を分かりやすい理由として挙げた学生が多く、語彙や表現が「別項目になっていて分かりやすい」といった教材の構成に関する意見もみられた。これらの意見は、教師が教材を作成する際に工夫した点と一致する。よって、今回、教師が教材作成の際に考慮した点は、学生の教材の分かりやすさにつながるための項目であったと言える。

ただ、教材を分かりやすいと評価しながらも、理由には教材への改善点として、「グラフ説明の例がもっと必要」、「語彙を増やしてほしい」という意見も書かれていた。さらに、興味深いことに、教材の分かりやすさを「どちらとも言えない」及び「そう思わない」と評価した学生の中には、その理由として、「例もグラフも少ない。減っているグラフの例も入れてほしかった」のような教材の情報量や難易度に関する意見があった。これは、表・グラフの授業に興味・関心を持ったからこそその意見である。

以上のことから、学生によって今回の教材で扱った語彙や表現、グラフの数を豊富とするか不足とするかは判断が変わるが、概ね学生は、今回の教材を分かりやすかったと評価していることが明らかとなった。

6.2.2 授業で得られたもの

質問項目②「グラフの授業で、得られたものがありましたか」の回答結果を表3に示す。()内は、回答者数である。

表3 「グラフの授業で、得られたものがありましたか」の回答結果 (54名)

大変そう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	まったく そう思わない
40.7% (22)	50.0% (27)	9.3% (5)	0% (0)	0% (0)

最も多かった回答は、「そう思う」で50.0%、次いで「大変そう思う」で40.7%であった。この

2つの評価項目を合計すると、90.7%の学生が授業で得られたものがあつたと評価しており、得られたものがないと考えている学生はいないということがわかった。

得られたものがあつたと評価した理由をまとめると、3点ある。(1) グラフの読み方や読み取り方が分かり、読解等に役立つ点、(2) グラフを使ったプレゼンテーションの方法を学び、実践できた点、(3) 将来の仕事に生かせるの3点である。この授業を行う際に教師が配慮したことは、「まず、表・グラフの理解力を身につけさせることに重点をおいて指導をし、徐々に産出の練習へと移行していく」という点である。理解から産出への流れを意識して指導した結果、学生も理解と産出、それぞれに関することが得られたと実感していることが分かった。

6.2.3 今後、役に立つか

質問項目③「グラフの授業で学んだことは、今後、役に立つと思いますか」の回答結果を表4に示す。()内は、回答者数である。

表4 「グラフの授業で学んだことは、今後、役に立つと思いますか」の回答結果 (54名)

大変そう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	まったく そう思わない
53.7% (29)	31.5% (17)	13.9% (7)	1.9% (1)	0% (0)

最も多かった回答は、「大変そう思う」で53.7%、次いで「そう思う」で31.5%であった。この2つの評価項目を合計すると、85.2%の学生が今後、役に立つと考えていることがわかった。その理由として、仕事でのプレゼンテーションやディスカッション場面を想定していること、さらに、ニュースや新聞の理解に必要と考えていることが明らかとなった。

6.2.4 その他の意見

質問項目④「そのほか、グラフを勉強しての感想や意見を自由に書いてください」には、大きく2つの意見が書かれた。それは、(1) グラフに関する学習への意欲的な意見 (2) グラフに関する学習が難しいとする意見である。(1) については、24.1%、(2) については、25.9%の学生が記述し、それぞれ全体の四分の一に相当する学生数であった。

(1) グラフに関する学習への意欲的な意見は、「いろいろな種類のグラフを扱って欲しい」、「グラフの比較もやりたい」、「今後も続けてほしい」というものであった。次に、(2) グラフに関する学習の難しさについてである。意見として、「初めて勉強したので難しかった。桁の多い数字や小数点以下の言い方」、「3年生には難しいので、4年生でよい」といった回答がみられた。

本調査により、教材は分かりやすく、授業は将来に役立つようなものが得られたと考えている学生が多いことが明らかとなったが、自由記述から、分かりやすかったものの、難しさを感じつつ学習していた学生もいたことが明らかとなった。

7. 表やグラフに関する日本語能力の育成のために配慮すべきこと

表やグラフに関する日本語能力の育成を目指した授業を実践するにあたり、筆者らは授業や教材が、(1) 理解から産出、(2) 視覚形態の易しいものから難しいものへと段階的に進む点に配慮した。これは、質問紙調査で学習者が教材の分かりやすさの理由として挙げていたことと一致しており、初めて表やグラフを学習する学習者にとって必要な観点であると言えよう。また、筆者らは、教材作成において、語彙や表現を一覧にしたり、グラフを使った代入練習や聴解練習を取り入れたり、学生にとって身近で、ディスカッションの話題に関連した表やグラフを選んだりすることに配慮した。これらの点についても、学習者は教材の分かりやすさの要因として挙げていた。その一方で、「分かりやすいが難しい」、「グラフ説明の例がもっと必要」、「語彙を増やしてほしい」などの意見も見られたことから、今後は、さらに例を増やしたり、様々な形態のグラフを取り扱ったりすることを検討したい。

以上述べてきたように、表やグラフに関する日本語能力の育成を目指した実践は、学習者から概ね好評だった。しかしながら、質問紙調査の結果では、「タイはあまりグラフを使わないが、日本人はよくグラフを使うことに気がついた」「日本人は、データが好きなので仕事に役立つと思う」「日本はデータが多いので、会社やプレゼンでグラフの語彙が必要だと思う」という記述が見られ、表やグラフを扱うことを日本人の嗜好と捉えている学生が数名いることがわかった。このことから、表やグラフを扱った授業をデザインする際には、表やグラフが客観的に意見を述べる方法の一つであることをしっかりと認識させる必要があると考える。改善例としては、表やグラフを扱う初回の授業において、客観的資料を使う意義を理解させる時間を設けるなどがある。

さらに、今回の実践において、特に産出面は、学習者に負荷の高いものだったようである。適当なグラフを見つけられず、テーマを変更したり、授業では扱っていない伸び率や前年度比を表すようなグラフを持って来たりする学習者も見られた。また、桁数の多い数字の読み取りや折れ線の山場がいくつもあるような複雑なグラフの中で、注目するポイントを絞り込むことも難しかったようである。これは、短期間に多くの要素を詰め込みすぎたため、十分に指導できなかった点である。以上のことから、表やグラフに関する授業をデザインする際には、より長期的な積み上げを意識する必要がある。

8. 今後の課題

中級レベルになると、読解や作文、日本事情などの授業でも客観的資料として、表やグラフ、ニュースなどを取り入れる。さらに、質問紙調査の結果からもわかるように、企業への就職を希望している学生にとって、表やグラフの理解と産出は、今後必要だと考えているスキルと合致していたようだ。これらのことから、表やグラフに関する日本語能力（理解力と産出力）の育成は、「聴解・会話」科目だけではなく、他の科目でも一貫して指導していったらいいのではないだろ

うか。

今後も、表やグラフに限らず、口頭発表能力の育成に関して「どのような力」を「どの段階」で「どのような順に」伸ばしていくのかという視点に立ち、実践を重ねていきたい。

参考文献

- 大藤美帆(2001)「日本語口頭発表クラスの改善に向けて：教師が気をつけること」『新潟大学留学生センター紀要』第4号、pp70-78
- 神吉隆子(1995)「上級日本語学習者の口頭発表における問題点とその指導」『流通経済大学論集』第29号4巻、pp73-96
- 高橋純子(2001)「口頭発表活動における学習者同士の相互評価の役割」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第16号、pp133-145
- 藤家智子(2004)「上級日本語学習者における口頭発表について：問題点と指導にむけて」『大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究』第2号、pp1-20
- 水野マリ子(2010)「日本語上級・超級留学生の口頭発表能力に関する一考察：修士課程の留学生について」『神戸大学留学生センター紀要』第16号、pp49-57

謝辞

本稿の質問紙調査の実施及び集計にあたり、ご多忙の中、翻訳を引き受けてくださったタマサート大学の Somkiat Chawengkijwanich 先生、ならびに調査に協力してくださった学生の皆様に深く感謝いたします。